

ノヴァーリスにおける「断章」の精神についての一つの断章

小田部 胤久

初期ロマン主義者、とりわけフリードリヒ・シュレーゲル（二七七一—一八二九年）とノヴァーリス（二七七二—一八〇一年）が、「断片||断章」⁽¹⁾を好んでいたことは、よく知られている。シュレーゲルに「断片||断章」という形式へのきっかけを与えたのは、『格言と反省』（二七九五年、独訳九七年）の作者シャンフォール（二七四〇—一八四四年）およびレッツシング（二七二九—一八一年）であったが⁽²⁾、おそらくノヴァーリスはこうしたシュレーゲルの影響下に、三〇〇〇以上の「断片||断章」を残したのであろう。だが、「断片||断章」の特質は何か、なぜそれを用いるのか、という点についてシュレーゲルもノヴァーリスもごくわずかの断章において触れるにとどまっている。ノヴァーリスの場合、「断片||断章」は彼の求める「小説（ロマーン）」に収斂するという性格を持っていたために、「断片||断章」に関して主題的な考察がなされなかった、ということもできよう。だが、「断片||断章」とは単なる（すなわち否定的・消極的な意味における意味における）準備段階なのではない。むしろ、人間の営みとは基本的に準備段階にすぎないという洞察こそが、「断片||断章」への注目を生み出した、ということが出来る。この意味において、「断片||断章」はロマン主義の思考の根本に位置する。すでに別稿においてシュレーゲルにおける「断片||断章」観を検討したので⁽³⁾、以下ではノヴァーリスが「断片||断章」の意義について論じる数少ない断章を手がかりとしつつ、ノヴァーリスの「断片||断章」観を探り、前稿に一つの断章を加えることにしたい。

一 断章集への眼差し

まず、ノヴァーリスがシュレーゲルおよび自己自身の作品をどのように捉えているのか、この点から考察を始めることにしよう。

「断片＝断章」という語の初期の用例を示すものとして、一七九六年七月八日付のシュレーゲル宛の書簡を取り上げたい。この書簡においてノヴァーリスは、「君のギリシア人の広告」(Novalis, IV, 186)に言及しているが、ここにいう「君のギリシア人」とは、九七年一月に刊行される『ギリシア人とローマ人』(Fr. Schlegel, I, 203-368)を指すのである。この書物に触れつつ、ノヴァーリスは次のように続ける。「私は「君の」断章(Bruchstücke)を思い出した。私の内に、知られざるものの直観が生まれ、この直観は私の精神を知れぬほど遠くへと駆り立てた(umhertreiben)」(Novalis, IV, 186)。ここで「断章」と呼ばれているのは、シュレーゲルがその時点までに公刊したさまざまな論考——具体的には「ギリシア文学の流派について」(九四年一月)「ギリシアの喜劇の美的価値について」(九四年二月)「美しいものの限界について」(九五年五月)「デイオティマについて」(九五年七月)などの短篇——であろう。ノヴァーリスは、これらの「断章」が「知られざるものの直観」を生み出し、彼自身の思考を「遠くへと駆り立て」たことを思い出している。

翌九七年には『リュツェーウム』誌にシュレーゲルの「ゲオルク・フォルスター——ドイツの古典的作家の特性描写の断章」(Fr. Schlegel, II, 78-99)「レッツィングについで」(100-125)「批判的断章」(147-163)などの論考が発表されたが、同年一月二六日のシュレーゲル宛書簡においてノヴァーリスは次のように述べている。「私は、君の〔批判的〕断章(Fragmente)をレッツィング〔論〕とともにすでに読んだ。レッツィング〔論〕が君のあらゆる格言風ディオニュソス讃歌の中で最も気に入った。……君の断章は全く新しく——真の革命的な張り紙だ。多くは私の髓に染み入るほど気に入った」(Novalis, IV, 241)。「ゲオルク・フォルスター」論はシュレーゲルが副題に「断章」という語を付した最初の論考であり、「批判的断章」は彼の

最初の断章集である。また、「レッシング」論は「レッシングの「断片と酵素 (Fragmente und Fermente)」」(Fr. Schlegel, I, 107-108)に着眼するものであり、シュレーゲルの最初の「断片断章」論といつてよい。こうしたシュレーゲルの影響下に、ノヴァーリスは同書簡において、シュレーゲル兄弟が計画している雑誌『アテネウム』に寄稿する予定の論考——すなわち『花粉』という題名で公刊されることになるが、ノヴァーリス自身はこの書簡の中で「神秘的断章 (mystische Fragmente)」(Novalis, IV, 243, cf. 240) ⁽⁴⁾と呼んでいる断章集——を、「私の中の継続的自己対話の断片 (Bruckstücke)」と呼び、それについて次のようにシュレーゲルに語る。「君はそれを好きないように扱っていい。それは革命的内容を十分持っているように私には思える。無論、私は現在あまりにも予備訓練 (Vorbungen) にとらわれているのだが。証明がなお欠けている」(241-242)。ここからは、「断章」がある種の予備的性格および継続性格を担っていることが読み取られよう。

実際この断章群は九八年にフリードリヒ・シュレーゲルの手が加えられた上で『アテネウム』第一巻第一冊に『花粉』と題されて公刊されたが、その末尾には次の断章が置かれている。

書物を書く技はなお発見されていない。しかし、それは今や発見されるべきときである。この種の断章 (Fragmente) は文字上の種子 (literarische Samen) ⁽⁵⁾である。そこには無論多くの実を結ばない粒も含まれているであろう。せめて、いくつか芽を出してくれるならばよいのだが。(II, 463, B.Nr. 114, cf. II, 462, VB Nr. 104)

この断章は断章集それ自体へのいわばメタレヴェルからの言及といつてよい。自らなお「予備訓練」の段階にとどまっていることを自覚するノヴァーリスは、「革命的内容」を持っているにせよいまだ「証明」を欠いているこの断章集が将来において芽を出すであろうことを期待する。換言するならば、ノヴァーリス自身の「継続的自己対話」の結果として生まれたこの断章集が、いわば読者との間にさらなる対話を続けていくこと、このことが望まれているのである。『花粉』のもとになった断

章集『雜録集』最終断章には次のように書かれている。「真の読者は拡張された著者でなくてはならぬ」(II, 470, VB Nr. 125)。
とするならば、ここで『雜録集』の次の断章を想起すべきであろう。

この種の断章 (Fragmente) を文字通りに受け取るう (beim Worte halten) とする人は、たしかに信頼に値する人 (誠実な人) であろうが、詩人を自称してはならない。一人人は常に慎重でなくてはならないのであろうか。年老いて熱狂することができない人は、若者の集いを避けるべきである。今や、文学上のサトゥルヌス祭である。生は多彩 (＝雑多) (bunt) であるほゞよゝ。(II, 466, VB Nr. 120)

断章集はある種の比喩として理解されなくてはならない。ということとは、比喩とその解釈が、「種子」とその発芽の関係に準えられている、ということもできよう(6)。

ノヴァーリスは九八年一月から九月にかけて『さまざまの断章集への準備稿』と題された草稿を物しているが、そこにもこの断章集それ自体を反省するメタレヴェルからの記述を挿入している。

私としては、*の付されたものを新たな断章集 (eine Sammlung von neuen Fragmenten) の内に取り入れ、そのために完成させたい。その他のものはなおかなり彫琢される必要がある。進捗に応じて多くのものは不要になろうし、多くのものは別の光の下に現れることになろう、それゆえに、すべてを変化させるであろう大いなる理念 (die große, alles verändernde Idee) を彫琢する以前に、個々の部分を完成させる気にはなれなかった。未完成のもの (das Unvollkommene) は断章として最も我慢できる仕方で見れる。それゆえに、「断章という」この伝達の形式は、全体においては完成していないが、しかし個々の注目に値する考察を与えることのできる人に対して、推薦されるべきである。(II, 595, VF Nr. 318)

断章(群)の継続性に関する考えはここにも読み取れるが、ここで重要なのは、この断章において「断章」を書くことの正当化が図られていることである。ノヴァーリスは、部分と全体とのかわりに着目する。全体の理念、それは「すべてを変化させる」ものである。すなわち、全体が明確になるとき、それを構成する「部分」もそれに応じて規定される。だが、まだ全体が未完成である場合、部分もまた同様に未完成であることを免れない。すなわち、部分は将来において修正されるべきもの、いわば将来へと開かれたものでなくてはならない。「断章」とは、こうした未完成なものとしての部分を意味する。それゆえに、いまだ「全体」の「理念」をいまだ明確にしていなくても、「個々の注目に値する考察」を持つている人は、あえて「断章」という伝達形式を用いることが許されるし、また用いるべきなのである。無論その人は、自らの「断章」が将来において修正を受けることを予期してはならないが。

それでは、部分と全体との関係をノヴァーリスはいかに理解しているのであろうか。九八年二月二六日に、ノヴァーリスはユスト宛書簡において、自らがそれまでに公刊した「私の引き裂かれた考え (meine abgerissene Gedanke) 」⁽⁷⁾としての断章集『花粉』および『信仰と愛あるいは王と王妃』について、それを「関心を惹く一連の考えの始まり (Anfänge interessanter Gedankenfolge) 、思考のためのテキスト (Texte zum Denken) 」とみなしている (IV, 270) 。また、ノヴァーリスは『やまやまの断章集のための準備稿』の一章(一七九八年五月)を「断章、あるいは思考のための課題 (Denkaufgaben) 」と名づけている (III, 564) 。「断章」とは、そこからさらに一連の思考が展開するところの「課題」⁽⁸⁾としての「始まり」なのであるから、ある系列の一項として捉えられなくてはならないであろう。そして、この系列が「部分」(としての「断章」)と「全体」とを結びつける。

二 断章と系列

「断片||断章」と「全体」との関係について考察するに当たり、まずは次の断章（二七九九—一八〇〇年）を参照しよう。

連関 (Zusammenhang) がなごといえ、連想 (Assoziation) によつて夢のような物語。ただ諧調をもち美しい言葉に満ちているが、いかなる意味も連関も持たず、せいぜい個々の詩節が理解できるような詩、それらは、単なる断片 (auter Bruchstücke)のごとく、多種多様な事物から成り立っているにちがいない。真の詩はせいぜい全体においてアレゴリーの意味を持つことができるにすぎず、音楽のように間接的に作用しうるのみである。それゆえに、自然は純粹に詩的である。(III, 572, Nr. 113)

この断章はノヴァーリスの「詩」の捉え方を明確に示している。彼がここで提起する「詩」の理念とは、「ただ諧調を持ち美しい言葉に満ちている」が「いかなる意味も連関も持たないようなもの、(純粹詩)とでも形容しうるような詩である。こうした詩はいかなる「意味」にも「連関」にも支えられていないために、ばらばらな「単なる断片」から成り立っているようにみえる。しかし、こうした「連関」の欠如はいわば表面的ないし直接的な次元においてのことにはすぎない。実際にはこれらの「断片」は「全体においてアレゴリーの意味を持つ」。無論、こうした「アレゴリーの意味」はその「詩」を構成する個々の出来事の内に直接的に示されてはならず、ただこうした個々の出来事によつて間接的に指し示されるにすぎない。それゆえに、「詩」は「音楽のように間接的に作用しうるのみである」といわれる。とするならば、「断片||断章」とは、ノヴァーリスにとつて、多種多様で相互にばらばらな存在でありつつも、その集合を通して一つの意味を指し示すことのできるものである。そして、こうした「断片||断章」のあり方を典型的に示しているのが、ノヴァーリスによれば、「自然」である。「自然は純粹に詩的である」という言葉はこの意味に理解すべきであろう。

ここで想起されるのは『一般草稿』第九八六断章に見られる「メルヒエン」論である（一七九八年二月—九九年三月）。

一つのメルヒエンは本来、夢の像 (Traumbild) のごとく——連関を欠き (ohnen Zusammenhang) ——不可思議な事物や出来事の総体 (Ensemble) である——たとえば音楽的幻想曲——エオリアンハープによる和声の継起 (die harmonischen Folgen) ——自然それ自体。 (III. 454, AB. Nr. 986)

「夢」「音楽」「自然」、これら三者によって特徴づけられる「メルヒエン」は、より高次の「アレゴリーの意味」を持つへ断片断章の総体としての詩にほかならない。その限りにおいて、この「総体」の内には独自の連関が認められるというべきであろう。実際ノヴァーリスは、同断章において、「より高次のメルヒエン」においては、「メルヒエンの精神を叩き売りすることなく、何がしかの意味——（連関、意義など）がもたらされる」と続けている (ibid.)。つまり、「連関を欠」いていくこと、「連関」がもたらされることは、決して矛盾しない⁽⁶⁾。

『一般草稿』第三三四断章（一七九八年九月—一〇月）の「メルヒエン」論では次のように記されている。

真のメルヒエンにおいてはすべてが驚異的で——秘密に満ち、連関を欠いて (unzusammenhängend) なくてはならない。全自然が驚異的な仕方ですべてが全精神世界と混ざり合っていないなくてはならない。遍き混沌の時代——没法則性——自由——自然の自然状態——世界（国家）に先立つ時代。世界に先立つこの時代は、いわば世界の後にくる時代のばらばらの諸特徴 (die zerstreuten Züge) を与える、それはちょうど自然状態が永遠の国の独自の像であるように。……

将来の世界においては、すべてがかつての世界においてあったようにある、しかしすべては全く「かつての世界においてとは」異なっている。将来の世界は理性的な混沌である、すなわち自己自身の内に浸透した混沌、……「乗された混沌、ない

し無限の混沌。

真のメルヒェンは同時に予言的表現——理想的表現——絶對的に必然的な表現でなくてはならない。真のメルヒェン詩人は将来を透視する予言者である。(III, 280, AB 234)

メルヒェンは、たしかに「連関を欠いて」いるために「混沌」であるにせよ、この「混沌」はありうべき「将来の世界」を示している。とするならば、この「将来の世界」こそ、メルヒェンが間接的に指し示す「アレゴリーの意味」であるといつてよい。そして、この「アレゴリーの意味」を通して「混沌」としてのメルヒェンは独自の「連関」を獲得する。

「断片」という語を用いた用例として注目すべきは、一七九九年二月二七日付のカロリーネ・シュレーゲル宛書簡に見られる次の一節であろう。

どの社会も個々の人間からではなく家族からなる。ただ家族のみが社会を形成しうる。個々の人間は、ただ断片 (Fragment) としてのみ、すなわち家族の一員となる素地 (Anlage zum Familienglied) との関連においてのみ、社会の関心を惹く。
(IV, 278)

「断片」とは、全体との連関を担った(ないし担いうる)「素地」を持つ限りにおける部分のことである。そのとき、個々の部分は全体のへ一員＝一項 (ein Glied) として捉え返されることになる。無論、ここでノヴァーリスが覚えて「素地」という語を用いていることに注意しなくてはならない。「素地」といわれるのは、断片と全体との関係が一定の仕方で現実化されてはおらず、いまだ可能性の状態にとどまっているからである。断片と全体との連関は将来へと開かれた関係でなくてはならない。

先にノヴァーリスが自己の断章集『花粉』および『信仰と愛あるいは王と王妃』を「関心を惹く一連の考その始まり (Anfänge interessanter Gedankenfolge)」(IV, 270) と規定していたことを確認したが、「始まり」とはそこからある系列が生じる項にはかならない。『花粉』第六六断章を参照しよう。

われわれの生のあらゆる偶然事 (Zufälle) は、そこからわれわれが望むものを何でも作りうる素材である。多大の精神を有する人は、自己の生から多くのものを作り出す。いかによく知られたもの (Bekanntheit) であれ、いかなる出来事 (Vorfall) であれ、それは全く精神的な人にとっては、無限の系列の第一の項 (erstes Glied einer unendlichen Reihe) 、無限のロマン (小説) の始まり (Anfang eines unendlichen Romans) である。(II, 437/439, B. Nr. 66 = II, 436/438, VB. Nr. 65)

「断片」とはこの断章にいう「偶然事」にはかならない。あらゆる出来事が、その他の出来事へといたる「無限の系列」の中の「一頂」たりうるのであり、その限りにおいてそれは「断片」なのである。

ある「断片」から作られる「無限の系列」を「ロマン」と呼ぶノヴァーリスは、系列化を通して「通常のものに神秘に満ちた外観を、既知のものに未知のものに威厳を、有限のものに無限の仮象を与える」操作を「ロマン化 (romantisieren)」と呼ぶのだが (III, 545, VF. Nr. 105) 、この点についてはここでは措いておこう⁽⁹⁾。重要なことは、有限な出来事がこの系列を通して無限性とかかわる、ということである。このことはさらに、個々の出来事という偶然性が、この出来事を一つの項とする系列の合法性と交わる、ということをも意味する⁽¹⁰⁾。『さまざまの断章集への準備稿』(二七九八年一月—九月) の第二四二断章には次のように書かれている。

与えられた量の偶然事 (Zufälle) と状況から、適切に秩序づけられた、合法的な系列 (wohlgeordnete, gesetzmäßige Reihe)

を作り出し、こうしたあらゆる偶然事を合目的に導く (zweckmäßig hindurchführen) ことで一つの目的に向かう一人の個人を作り出す小説家は、一種の押韻遊び (Bous rimes) を行っている。……一人の個人が連続的系列 (kontinuierliche Reihe) を通して変化ないし変容することこそ、小説の興味深い素材をなす。(II, 580, VF N: 242)

一つの「押韻」を出発点として韻を踏む二つの詩行をいわば事後的に作る詩人のごとく、小説家は与えられた「偶然事」を出発点としてそこから「一つの目的に向かう一人の個人」を作り出す。こうした事態を、先に検討した「断片」の規定に即して捉え返すならば、次のようにいうことができるであろう、すなわち、「断片」とは、それを一項とする「連続的系列」を通して「変化ないし変容」することによって一つの全体とかかわる、と。

三 断章と共同哲学

先に明らかにしたように、自らがなお「予備訓練」の段階にとどまっていることを自覚するノヴァーリスは、自己自身の「連続的自己対話」の結果として生まれた断章集がさらに読者との間にさらなる対話を続けていくことを望んでいた。こうした対話の継続は、以上において検討した「連続的系列」の問題といかに関係するのだろうか。この点が最後に明らかにされなくてはならない。

この問いに答える手がかりを与えてくれるのが、『さまざまの断章集への準備稿』の冒頭部分である。第二断章には次のように書かれている。

私の哲学的修業時代に由来するこれらの多様な見解は、成立しつつある自然 (die werdende Natur) を考察することに喜びを

見出す人を楽しませうであらうし、また、こうした研究にお携わっている人には無用なものではありえないであらう。
(II, 522, VF Nr. 2)

『花粉』第一〇四断章の「文学上の種子」の比喩が語ろうとしていたことが、ここにおいてより明確に示される。ノヴァーリスが書き記す断章群は、完成した彼の思想ないし哲学体系を叙述するものではなく、彼の思考それ自体の展開過程ないし生成過程を物語る記録である。だが、まさにそれゆえに、自らもまたこうした思考の展開過程ないし生成過程の内にいる人、すなわち「哲学的修業時代」の内にある人は、このノヴァーリスの試みに関心を寄せるにちがいない。すでにカントは、「人は哲学を（その歴史は別として）学ばない」、¹¹「人はただ哲学することを学ばうのみである。すなわち人は理性の才能を、理性の一般原理を遵守しつつ、一定の既存の試みに即して——ただし、この原理それ自体をその源泉において探求し、確認したりあるいは反駁したりする理性の権利を持つ限りに即して——訓練することができるのみである」(Kant, KrV, B 865-866)、と述べていたが、ノヴァーリス自身このカントの言葉を受けつつ「哲学すること」(Novalis, II, 522, VF Nr. 1)がいかに伝達されるのかをこの断章集の冒頭において問題とする¹²。続く第三断章は次のように始まる。

文字は哲学的伝達 (die philosophische Mitteilung) の単なる助けにすぎず、哲学的伝達の本来の本質は、一定の思考の歩みを喚起することにある。語る人は思考し生産する。すると、聞く人は追思考し再生産する。言葉は、「語る人が語るに先立って」予め考ええる (Vordenken) ためには当てにならない手段であり、また、ある一定の刺激を聞く人に伝達するには信用のかけない媒体である。真の教師は道標 (Wegweiser) である。生徒が実際に真理を好んでいるのであれば、生徒が求めてものを生徒に見出させるためには、ただ暗示 [示唆・合図] (Wink) があるだけでよい。それゆえに、哲学の叙述は単に主題、冒頭の命題、原理からなる。それは、真理を友とする自立的な人々のためのものである。主題の分析的詳述はただ怠慢な人、

あるいは訓練を積んでいない人のためのものである。後者はこのことを通して飛翔することを、そして一定の方向に自己を維持することを字ばなくてはならない。(Novalis, II, 522, VF Nr. 3)

ここで主題とされるのは「精神と文字」の対比である⁽¹³⁾。哲学の叙述は「文字」という固定されたものに頼らざるをえない。だが、哲学において伝達されるべきなのは、「思考する」という働きである。すなわち、「語る人」は「思考し生産する」のだが、この思考し生産する過程それ自体を「語る人」は「聞く人」(ないし読む人)に伝達しようとする。それゆえに、本来「聞く人」(ないし読む人)が行うべきは「追思考し再生産する」ことである。それゆえに、「文字」という固定された手段はこの伝達に対しては不適合であるというほかない。しかし、「文字」なくして伝達は不可能である。ノヴァーリスは決して文字の存在を否定しているのではない。「断章と研究一七九九—一八〇〇年」第一九六断章(一七九九年九月—一〇月)において、ノヴァーリスは次のように語っている。「文字とは、寺院ないし記念碑に相当する。意味がなければそれはもちろん死んでいる(精神から文字への変化(Verwandlung)について)。文字についての精神に満ちた歴史家が存在する、すなわち文献学的古文書学者が。(古文書学者とは、本来的には、文字を復興する人、文字を呼び覚ます人(ein Aufwacker)である。文字の効用)」(III, 580, FHS Nr. 196)。必要なことは、「精神」を固定化するという「文字の効用」を前提としつつ、固定化された精神を再び呼び覚ますことであろう。つまり、精神と文字との関係は双方向的なのである。『さまざまの断章集への準備稿』第二断章に即して換言するならば、哲学の「教師」としての語る人が「文字」の内に固定した「思考し生産する」過程それ自体を、この「文字」から再構成することが必要とされる。それゆえに、「文字」とは「生徒」としての読み手にとっては、むしろ「道標」ないし「暗示(示唆・合図)」にならなくてはならない⁽¹⁴⁾。「文字」を「暗示」とするとき、「生徒」は「真理を友とする自立的な人」となる。

しかし、この哲学の教育は、一方に教師が、他方に生徒がいる、といった一方向的なものでもなければ、教師と生徒がとも

に自立的に(すなわち相互に独立に)真理をめざし「飛翔する」(Novalis, II, 522, VF Nr. 3) (15) というものでもない。第二断章は次のように結ばれる。

真に共同的に哲学すること (echtes Gesamphilosophie) は、愛する世界に向かつての共同の移動である。この移動にあつては、人は相互に交替して前哨の位置に立つ。この前線は、人がその中を動いている抵抗元素(「大気」)に対抗する最大の努力を必要とする。(ibid.)

すなわち、ここでノヴァーリスは「共同哲学」という理念を提起する。それは、集団の鳥が飛翔するように、人々が相互に先頭に立つて、ありうべき世界を探求していく、というものである。相互に教師にして生徒である、という関係の交換を通して人々は真理に近づく(16)。

『さまざまな断章集への準備稿』第二、第三断章において「断片||断章」という語は用いられていない。だが、ここにいう「暗示」とは、個々の部分と全体とのありうべき連関を意味している。この意味において、「暗示」とは「断片||断章」のあり方を指し示すものといつてよい。ノヴァーリスにとって「哲学的伝達」とは、自己自身の「継続的自己対話」の結果として生まれた断章集がさらに将来において読者との間にさらなる対話が続けてゆき、このようにして対話の継続が「連続的系列」を作り出していくことにほかならない。こうした「哲学的伝達」の可能性を支えているのは、「断片||断章」の精神である、ということができよう。

ノヴァーリスとシュレーゲルの「断片||断章」観は、シュレーゲルの「断章〔断片〕(ein Fragment)とは、小さな芸術作品と同様に、周囲の世界から完全に切り離され、それ自体において完成してはならない、ハリネズミのように」(II, 197, AF 206) という断章がいわば一人歩きしたために、しばしば対比的に捉えられることが多い。すなわち、シュレーゲルにとつ

て断章とは一つの閉じたものであるのに対し、ノヴァーリスにとつての断章は「課題」と「解決」(II, 540, VF Nr. 66)とつた思考の過程と結びつく、という解釈が一つの定説となっている(17)。だが、個と全体、有限と無限、現実性と可能性、現在と将来とを媒介する原理として「断片||断章」を捉え返すならば、むしろシュレーゲルとノヴァーリスの共通性こそが強調されるべきであらう(18)。

註

(1) 本稿において「断片」ないし「断章」という語は、Fragment および Bruchstück に対応する。ノヴァーリス(およびシュレーゲル)の執筆した個々の Fragment に関しては主として「断章」という訳語をあて、書かれたものとしての断章に限定されない意味を持つ場合には「断片」という訳語をあてる。なお、以下ノヴァーリスおよびシュレーゲルからの引用はいずれも批判版全集による。Novalis, Schriften. Historisch-kritische Ausgabe in vier Bänden, einem Materialienband und einem Ergänzungsband in vier Teilbänden. Stuttgart 1960. Friedrich Schlegel, Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe. Hrg. von Ernst Behler unter Mitwirkung von Jean-Jacques Anstett und Hans Eichner. Paderborn u. a. 1958. 必要に応じて断章番号を付す。ノヴァーリスに関しては、「ハムステルホイス研究」は HS、【雑録集】は VB、【花粉】は B、【なまぎまの断章集への準備稿】は VF、【断章と研究】は FS とそれぞれ略記する。

(2) 次の一七九八年の断章参照。「断片とは作家にとつて習作にして同時に素材である。ただドイツ人とフランス人のみが断片を有する。レッシングとシヤンフォール」(Fr. Schlegel, XVIII, 263; Nr. 830)。

(3) 「フリードリヒ・シュレーゲルと『断片』の精神——ロマン主義美学への一つの寄与——」【美学】(第三二五号、二〇〇六年)。「断片||断章」に関する従来の研究動向についても、同論考参照。

(4) ここでこの断章群が「神秘的」と呼ばれているのは、この断章群が独自の比喩表現に満ちたものであって、「字義通りに受け取」られなくてはならないからであらう。「この種の断章を文字通りに受け取らう」(beim Worte halten)とする人は、たしかに信頼に値する人(誠実な人)であらうが、詩人を自称してはならない」(II, 120, VB Nr. 120)。この断章については後に再度検討を加える。

(5) この「種子」の比喩は、いうまでもなく、新約聖書の種まきの譬え話を踏まえている(マタイによる福音書第一三章第一—九節、マルコによる福音書第四章第一—九節、ルカによる福音書第八章第四—八節)。

(6) 断章集「信仰と愛あるいは王と王妃」(一七九八年)の冒頭の断章において、ノヴァーリスは次のように述べている。「さまざまの人々からなる大きな社交の場で、わずかの人々と何か秘密のこと(Ewas heimliches)を語ろうとするのだが、席が隣り合っていない場合には、人はある特殊な言語において語らなくてはならない。この特殊な言語は、その語調の点で、あるいは比喩の点で、異質な言語(外国語)でありうる。後者は文彩ないし謎の言語(Rätsel Sprache)となろう」(II, 483, GL Nr. 1)。「文彩ないし謎の言語」であるという特徴は、ノヴァーリスのあらゆる断章群に当てはまるであろう。

(7) ちなみに、シュレーゲルもまた自らの「断片」断章」に関してしばしば abgerissen という形容詞を付している(Fr. Schlegel, I, 284, 295, 342, II, 236, AF 383)。前掲拙稿参照。

(8) ノヴァーリスは「さまざまの断章集のための準備稿」第六六断章(一七九八年二月—五月)において、「ただ一つの答え」のみが存在する「問い」との対比において、「課題」を「多くの答えが可能であるような問い」と規定し、哲学的命題とは本来的に「課題」である」と主張する(II, 539-540, VF Nr. 66)。

(9) ほぼ同様の見解がフリードリヒ・シュレーゲルの「批判的断章」第一〇三断章に見られる。前掲拙稿参照。

(10) 詳しくは拙稿「自然の暗号文字と芸術——自然哲学と芸術哲学の交叉をめぐるカント・シェリング・ノヴァーリス——」松山壽一・加國尚志編「シェリング自然哲学への誘い」(見洋書房、二〇〇五年)参照。

(11) この問題はノヴァーリスがライプニッツ流の記号結合法の理念から学んだ点でもある。ジョン・ノイバウアー「アルス・コンビナトリア——象徴主義と記号論理学」(原研二訳、ありな書房)参照。

(12) この問題はフリードリヒ・シュレーゲルの一八〇四年の「レッツィング論」においても主題的に論じられる。この点については、前掲拙稿「フリードリヒ・シュレーゲルと『断片』の精神——ロマン主義美学への一つの奇与——」参照。

(13) この断章は、一七九七年秋に書かれた草稿「ヘムステルホイス研究」第三五断章を踏まえている。この第三五断章は次のように始まる。「ヘムステルホイスは、ここで哲学の精神と文字についてすばらしい立場を示している。彼によれば、文字は……」(II, 373, HS Nr. 35) (以下は「さまざまの断章集への準備稿」第二断章とはば同文)。なお、ノヴァーリスが踏まえているのはヘムステルホイスの対話篇「アレクシスあるいは黄金時代について」(一七八七年)の一節であるが、ヘムステルホイスは哲学における伝達の困難さを論じるに際し、彼が対話篇という形式を用いていることが端的に示すように、「語る人」(ないし「語る人が発する言葉」)と「聞く人」との関係の問題としていたのであって、「精神と文字」の関係の問題としていたのではない(Nouveaux philosophiques de François Hemsterhuis, Nouvelle édition, augmentée de plusieurs pièces inédites, de notes et d'une étude sur l'auteur et sa philosophie par L. S. P. Meyboom, Leuwarder 1846, t. II, p. 194)。ヘムステルホイスを踏まえるノヴァーリスの場合も「語る人」と「聞く人」を主題としているが、しかし彼は同時に単に「言

葉」のみならずさらに「文字」をも問題としている。こうした論点の移行ないし拡大には、すでにハンザー版ノヴァーリス著作集の編者バルメスが指摘するように (Novais, Werke, Tagebücher und Briefe Friedrich von Hardenbergs, Hrsg. von Hans-Joachim Mahl und Richard Samuel, Bd. 3, S. 327-328)、フイヒテ【全知識学の基礎】(一七九四年)における次の一節が反映している。「知識学とは、単なる文字によっては全く伝達されず、ただ精神によってのみ伝達されるところのものである。というのも、その根本理念は、それを研究するいかなる人においても、創造的構想力を通して産出されなくてはならないからである」(Johann Gottlieb Fichtes sämtliche Werke, Herausgegeben von H. Fichte, Berlin 1845, Bd. 1, S. 284)。

(14) この「暗示〔示唆・合図〕」という概念は、フリードリヒ・シュレーゲルにおいても「断片」論とのかかわりにおいて重要な役割を果たしている。一七九七年の論考「レッシングについて」においてシュレーゲルは次のように述べている。「彼の著作の中で最も関心を惹くもの、最も徹底的なものは、暗示と示唆 (Winke und Andeutungen) であり、彼の著作の中で最も豊かで完結しているものは、断片の中の断片である。……彼の的確な推論は、たいていの場合、機知に満ちた思いつきの連なりにすぎない」(Fr. Schlegel, II, 112)。

(15) ちなみに、この「飛翔」の比喩はヘムステルホイスに由来する (Hemsterhuis, op. cit., p. 192)。

(16) こうした共同の哲学に関しては、同時期のシュレーゲルも同様の理念を示している。「リュツェウム」第一一二断章(一七九七年)には次のようにある(「分析的」という語の用法もノヴァーリスとシュレーゲルに共通である)。「分析的作家は、読者があるがままに考察する。分析的作家は、読者に適切な効果を与えるために、この考察に従って計算し、自己の機械(＝文章・書物)を作る。総合的作家はあるべき姿の読者を自ら構成し創造する。総合的作家は、読者とは静的にして死せる存在ではなく、生きた反応を示すものである、と考える。総合的作家は自らが見出したものを、読者の目の前に段階的に生成させ、あるいは自分が見出したものを読者自身が見出すように誘う。総合的作家は決して一定の効果を読者に与えようとは思わない、むしろ、総合的作家は読者とともに、きわめて緊密な総合的哲学ないし総合的文学という聖なる関係の内に入る」(Schlegel, II, 161)。